

# 英国簿記史とインピン『簿記書』

吉澤英一

キーワード：16世紀・英国簿記史・インピン簿記書

- 1 序
- 2 16世紀の英国簿記書
- 3 ルカ・パチョーリ 1494年版『簿記論』
- 4 インピン 1547年版『英訳簿記書』
- 5 ルカ・パチョーリ 1494年版『簿記論』とインピン 1547年版『英訳簿記書』との比較
- 6 結び

## 1 序

2002年7月、専修大学図書館で1494年版ルカ・パチョーリ『スμμα』収蔵を祝う「イタリア・ルネサンスの商人に宛てた贈物」展が開催された。

私も参加して、ルカ・パチョーリ『スμμα』（複式簿記を含む数学全書）初版本を目の前でみる事ができた。本物の迫力はすごい、本当に感動した。専修大学のおかげで、原本にめぐり逢えたことに心より感謝する。

中世イタリア、1494年にルカ・パチョーリ『簿記論』が出版され、その影響はアルプスを越え、ドイツやオランダへ、海を渡って英国やアメリカへ、そして日本には、380年後の明治6年と明治7年に福澤諭吉『帳合之法』によって複式簿記が導入された。これは、まさに簿記・会計世界一周論といえるのである<sup>1</sup>。

ここでは、英国16世紀の簿記書の概要を述べ、ルカ・パチョーリ1494年『簿記論』とインピン1547年版『英訳簿記書』との比較をしたいと思う。

## 2 16世紀の英国簿記書

英国における最初の複式簿記解説書は、ヒュー・オールドカースルの『有益な論文』である。しかし、当該簿記書はまた、現在のところ一冊も発見されていない「幻の書」であり、その内容は、これを修正・拡大したジョン・メリスの『簡単な手引』(1588)を介して推測されているにすぎない。このオールドカースル簿記書に続いて、『著名にして優れた著作』(1547)が出版されるが、これは、オールドカースル簿記書の出版と同じ1543年に、その当時の国際商業におけるメトロポリスとして未曾有の繁栄を示していた南ネーデルランドのアントウェルペンで刊行されていたインピン簿記書の英訳版であった<sup>2</sup>。

1912年に出版された、アーサー・H. ウルフ『会計史』によれば、16世紀、英国における簿記文献は次のとおりである<sup>3</sup>。

1543年は、簿記の歴史上重要な年であった。なぜなら、パチョーリの著書が三つの国に紹介されたからである。すなわち、ほとんど時を同じくして、パチョーリ『簿記論』が、オランダ語、フランス語および英語に翻訳されたのである。

最初の二つの翻訳書については、1543年オランダのヤン・インピン・クリストッフエル (Jan Ympyn Christoffel) がアントワープでオランダ語訳およびフランス語訳を出版した。

最後の英語訳も同年に出版されたが、それは、当時数学の教師であったヒュー・オールドカースル (Hugh Oldcastle) によって書かれたものであって、われわれの所有する記録の範囲では、英語で書かれた最初の簿記文献である。しかし、遺憾ながらオールドカースルの原典は現存していない。そこでわれわれは、彼に関しては、当時「学校の教師」と自称していたジョン・メリス (John Mellis) によるリプリントから推定するのである。

メリスは数学者であり、ケンブリッジのトリニティ・カレッジ (Trinity College) のロバート・フォース博士の助手として働いていたが、その後パプ

リック・スクールの数学の教師となり、1564年以来、ロンドンのサウス・ワークのプライベート・スクールを経営した。

メリスの著書のタイトルは、『簡単な手引』(A Briefe Instruction) であるが、この題名によって、この著書が独創的なものであるという印象を与える。しかしメリスは、「読者へ」と題する書簡の中で、自分は「1543年8月14日、学校の教師であったヒュー・オールドカースルによって収集され、ロンドンで出版された古いコピーの再生者にしかすぎない」と、素直に述べている。

メリスの著書の大部分は、疑いもなくパチョーリの単なる翻訳者であったオールドカースルの著書を更新したものにすぎなかった。オールドカースルの翻訳書の終わりには、“Finis”（結論）という文字がつけられているが、メリスはさらに一般財産目録についての例をあげて、次のように述べている。

「ここで私の著述を終わるが、これらの諸規則をさらに一層理解しやすく、かつ実用に役立たせるために、私は次のように仕訳帳、元帳および簡単な財産目録を加えた」と。

しかし、メリスの遂行した独創的努力はほとんど価値がなかったのである。

1547年、ロンドンで『会計帳簿の記録方法を説述した有名にして卓越した著書』というタイトルの著書が公にされた。この著書は、すでにわれわれが述べたヤン・インピンの英訳書であることが最近（1912年頃）になって判明した。

ヤン・インピンの著書は、英国人とオランダ人の間で行われた活発な貿易を通じて、英国に伝えられたことは疑う余地がない。これは、ちょうど当時商人としてヴェネツィアに滞在していたインピンが、パチョーリの著書を知ったことと類似している。

ジェイムズ・ピール (James Peele) の「完全な計算記録の方法と様式」は、現在（1912年頃）われわれの所有しているもののうち、翻訳でなく英文で書かれた最初の簿記文献であった。なぜなら、この著書は1553年に出版されたが、オールドカースルの原典（1543年版）は、われわれの知る限りでは現存していなかったからである。

ジェイムズ・ピールはエリザベス女王時代の有名な劇作家ジョージ・ピールの父であったが、彼は簿記のような散文調の主題を取り扱う場合でさえも、しばしば韻文調の詩句に陥るような家庭的・詩的傾向を示したのである。

ピールの第二の大著書は、『借方貸方会計の完成への道案内』というタイトルで、1569年に出版された。本書は、大げさなタイトルに値するとはいえないし、またピールの記入法に従って帳簿を記録した場合には、完全性が殆ど失われてしまうのである。それにもかかわらず、ピールは二、三の貴重な提案をしている。第11章に書かれている最も興味深いことは、次のとおりである。

「主人は、元帳に記録する場合に、主人の財産が秘密に保たれるように、自分自身または自分の会計係以外の者が記録する場合には、自分自身の管理の下に実施されるように注意しなければならない。」

ウルフによれば、1547年、ロンドンで『会計帳簿の記録方法を説いた有名にして卓越した著書』というタイトルの著書が公にされた。この著書は、ヤン・インピンの英訳書であることが最近になって判明した。

ここで言う最近とは1912年直前頃であると思う。これは1912年に出版された、ウルフ『会計史』の成果である。

この1912年に出版された、アーサー・H. ウルフ『会計史』の16世紀、英国における簿記文献の中には、1567年に書かれた、ジョン・ウェディントンの John Weddington: A Breffe Instruction, 1567、アントワープで出版された簿記書『簡単な教授』は紹介されていない。この文献は1957年に世界でただ1冊、Aberdeen の Blairs College で発見された為、1912年当時はまだ発見されていなかったのである。

英国16世紀の簿記書をまとめると下記のとおりである<sup>4</sup>。

- 1、1543年ヒュー・オールドカースル (Hugh Oldcastle) の『有益な論文』  
“A profitable treatye”

- 2、インピン簿記書 Jan Ympyn Christoffels: Nieuwe Instructie, Nouvelle Instruction, 1543の英訳本『著名にして優れた著作』A notable and very excellent works, 1547
- 3、ジェームス・ピールの『完全なる勘定の方法と様式』James Peele: The maner and fourme how to kepe a perfecte reconyng, 1553 ロンドンで出版
- 4、ジョン・ウェディントンの簿記書『簡単な教授』John Weddington: A Breffe Instruction, 1567 アントワープで出版
- 5、ジェームス・ピールの第2作『貸借勘定熟達への小径』James Peele: The Pathe waye perfectnes, in th'accompte-sof Debitour, and Creditour, 1569 ロンドンで出版
- 6、ジョン・メリスの簿記書『簡単な手引』John Mellis: A Briefe Instruction, 1588 ロンドンで出版

### 3 ルカ・パチョーリ1494年版『簿記論』

世界で最初に出版された複式簿記の文献は、ルカ・パチョーリが1494年に出版した『スμμα』である。ルカ・パチョーリは中世イタリア、主にヴェネツィアの商人達が行っていた複式簿記を参考にして、書物を書いたのである。中世イタリアの複式簿記の実務は、ルカ・パチョーリが書いた『スμμα』によって理論としてまとめられ、以後出版された簿記の書物と簿記実務に、多大な影響をあたえたのである。

『スμμα』の正式な名称は、Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita スμμα・デ・アリスメチカ・ジェオメトリア・ポロポルチオーネ・エット・プロポルチョナリータであり、「算術・幾何・比及び比例全書」という意味である。Summa はラテン語で『スμμα』と発音し、この書物のタイトルはラテン語でかかれている。イタリア語では『ズμμα』と発音するのである。本文はイタリア語で書かれているが、以下ここでは『スμμα』という。

『スُمマ』は616ページ、308葉の大きな書物であり、簿記論の部分は、第一部、第九編、論説第十一「計算及び記録に関する論説」の199葉から210葉までである。『スُمマ』出版の時代のヴェネツィアは、当時のヨーロッパにおいては印刷物出版の最も中心的なところであった。ヴェネツィアの印刷物は、紙の質と文字の美しさでは有名であり、15世紀末のヴェネツィアの出版物は、2835点あり、そのうちの 하나가、ルカ・パチョーリの『スُمマ』ということになる。ヴェネツィアのパガニーノ・デ・パガニーニ (Paganino de paganini) という有名な業者によって『スُمマ』は印刷され出版されたのである。また『スُمマ』第二版はトスコーラノで同じくパガニーノによって出版された<sup>5</sup>。

1494年 ルカ・パチョーリ『簿記論』<sup>6</sup>

## 第1章「序論」

- 2 「財産目録」
- 3 「財産目録の模範例」
- 4 「勸告と教育」
- 5 「整理」
- 6 「日記帳」
- 7 「役所の証明」
- 8 「日記帳の記入例」
- 9 「仕入の方法」
- 10 「仕訳帳」
- 11 「借方と貸方」
- 12 「仕訳帳例解」
- 13 「元帳」
- 14 「仕訳帳から元帳への転記」
- 15 「元帳転記」
- 16 「仕訳帳の商品勘定を元帳へ転記する方法」(商品勘定の転記方法)

- 17 「官庁との会計」
- 18 「ヴェネツィア財務局との会計」
- 19 「為替手形及び銀行による支払方法」
- 20 「商品交換取引」
- 21 「組合取引」
- 22 「諸費用の会計」
- 23 「支店の会計」
- 24 「銀行に関する会計」
- 25 「収入及び支出勘定」
- 26 「出張に関する会計」
- 27 「商品勘定と損益勘定」
- 28 「元帳勘定の繰越方法」
- 29 「年号の変更方法」
- 30 「計算書の作成」
- 31 「誤り記入の訂正」
- 32 「元帳の貸借平均」
- 33 「帳簿締切中の取引記入法」
- 34 「元帳勘定の締切と合計試算表」
- 35 「書類の保管」
- 36 「元帳記入上の規則」
  - I. 元帳への記帳
  - II. 仕訳記入法
  - III. 商人がメモしておくべき事項

ルカ・パチョーリの簿記論は、当時のヴェネツィア式簿記法を、著書『スママ』の一部に書き解説した。その概要は、上記の1章から36章であり、要約すると次のとおりである。

第1章から第5章までは、序論、財産目録、財産目録の模範例、勧告と教

育、整理という序論であり、商人が営業を開始する時に必ず財産目録を作成することを述べている。

第6章から第16章までは、日記帳、役所の証明、日記帳の記入例、仕入の方法、仕訳帳、借方と貸方、仕訳帳例解、元帳、仕訳帳から元帳への転記、元帳転記、仕訳帳の商品勘定を元帳へ転記する方法、という複式簿記の原理である帳簿組織として、日記帳、仕訳帳、元帳の三冊の帳簿を採用すべきことを述べている。この三帳簿制は、19世紀に至るまで多くの簿記文献に採用されたのである。

第17章から第26章までは、官庁と会計、ヴェネツィア財務局との会計、為替手形及び銀行による支払方法、商品交換取引、組合取引、諸費用の会計、支店の会計、銀行に関する会計、収入及び支出勘定、出張に関する会計という複式簿記における各項目の各種の会計処理について述べている。

第27章から第36章までは、商品勘定と損益勘定、元帳勘定の繰越方法、年号の変更方法、計算書の作成、誤り記入の訂正、元帳の貸借平均、帳簿締切中の取引記入法、元帳勘定の締切と合計試算表（元帳勘定の締切、試算表）、書類の保管、元帳記入上の規則（元帳への記帳、仕訳記入法、商人がメモしておくべき事項）という複式簿記における決算について、損益計算は商品別及び冒険商売ごとに計算すること、元帳の締切後に試算表を作成すること等について述べている。

このように、ルカ・パチョーリの簿記論は、序論、帳簿組織、各種会計、決算の大きく分けると四つに書かれているのである。

ルカ・パチョーリの簿記論は、『スُمマ』を出版してから16世紀のイタリアからオランダ、フランス、英国、ドイツ等のヨーロッパ諸国へイタリア式簿記として伝えられ広まったのである。そして、やがてアメリカにも伝わったのである。

日本へのイタリア式簿記の紹介は、明治になって西洋式簿記書として紹介された。それは、福澤諭吉訳『帳合之法』明治6年6月（1873年）である。



この書物は、アメリカの商売学校の簿記教科書を当時の人々に翻訳という形で分かりやすく紹介した、日本最初の西洋式簿記書といえる。もとをただせばこの書物の原点は、ルカ・パチョーリの簿記論であったともいえる。また、ルカ・パチョーリの簿記論は世界中の多くの国々でそれぞれの言語に翻訳され紹介されている。

日本では最初に、平井泰太郎氏が大正時代の1920年にゲイスベークが1914年に翻訳した英訳書から翻訳した。その後、黒澤清氏が昭和前期時代の1936年にペンドルフが1933年に翻訳した独訳書から一部翻訳をした。その後、昭和中期時代に入って、片岡義雄氏が1956年に、ペンドルフ、ゲイスベーク、クリヴェリ（1924年）の翻訳書から翻訳した。この時点ではまだ日本において、ルカ・パチョーリの中世イタリア語から直訳する会計学者は現れていない。その後、昭和後期時代に入って、本田耕一氏が1975年に、岸悦三氏が1983年に、片岡泰彦氏が1988年にそれぞれの著書で、ルカ・パチョーリの中世イタリア語から直訳をしている。平成時代になってから直訳する会計学者はまだ現れていない。

2002年7月、専修大学で展示された『スμμα』初版本は世界に百冊程度残存していると言われる。その内日本では、大阪学院大学、大阪商業大学、神奈川大学、久留米大学、慶應義塾大学、神戸大学、専修大学、日本大学商学部、広島経済大学、早稲田大学の10の図書館に収蔵されていることから、

『スμμα』大国<sup>7</sup>であると言えるのである。

#### 4 インピン1547年版『英訳簿記書』

オランダにおいて、簿記に関してフランダース語により記述された最初の書物は、1543年、ヤン・インピン・クリストッフエル Jan Ympyn Christoffel が出版した新しい教程 Nieuwe Instructie である。アントワープの商人であり広く各地を行商し、ベニスに12年間在住した彼は、ルカ・パチョーリ Luca Pacioli の影響を多大に受け、また仕訳帳及び元帳の形式はマンツォーニ

Manzoni に従っている。試算表をオランダに紹介し、期首の資産・負債の財産目録を作成し、同時にその評価をも提唱した最初の著者であった<sup>8</sup>。

1543年は、簿記の歴史上重要な年であった。なぜなら、パチョーリの著書が三つの国に紹介されたからである。すなわち、ほとんど時を同じくして、パチョーリ『簿記論』が、オランダ語、フランス語および英語に翻訳されたのである。

最初の二つの翻訳書については、1543年オランダのヤン・インピン・クリストッフエル（Jan Ympyn Christoffel）がアントワープでオランダ語訳およびフランス語訳を出版した。

インピン簿記書の英訳書、1547年、ロンドンで『会計帳簿の記録方法を説述した有名にして卓越した著書』というタイトルの著書が公にされた。この著書は、ヤン・インピンの英訳書であることが1912年頃になって判明した。

ヤン・インピンの著書は、英国人とオランダ人の間で行われた活発な貿易を通じて、英国に伝えられたことは疑う余地がない。これは、ちょうど当時商人としてヴェネツィアに滞在していたインピンが、パチョーリの著書を知ったことと類似している。

インピンのオランダ語簿記書は死後、未亡人の手で1543年にアントワープで出版され、同年にフランス語訳簿記書も出版された。これは英国のヒュー・オールドカースルの簿記書出版と同じ1543年である。これらの簿記書は、オランダ・フランス・英国における最初の複式簿記教科書となっている。この4年後に、インピン簿記書はフランス語の訳本から、英訳書が出版された。これは英国で出版されたと思われるが、出版者と英訳者が共に不詳で、英国の図書目録にもなく、英国ではこの原書は発見されていない。

インピン簿記書の1547年版英訳書は、1893年にバルグ博士によりエストニヤ共和国のニコライ高校でただ1冊発見され、1917年までここで保管されていたが、その後一時行方不明となっていた。しかし1910年に、当時モスクワ在住のバウエル博士がその写本を作成していた。

1963年に、ヤーメイ教授によって、ロシアのレーニン図書館の所蔵本が一時期行方不明とされていた英訳本自体であることが明らかにされた。誠に不思議な運命の書である。しかし、ここで注目すべきは、英訳本がエストニアで発見されたという点である。エストニアは西はバルト海に臨み、北はフィンランド湾に面した土地であるが、この英語簿記書が、北海沿岸の諸都市を越え、深くバルト海の奥地にまで流れてきたのは、この地を訪れた英国商人達が持ってきたものであろう<sup>9</sup>。

この英訳書には、英訳者の「読者への序」、次に原著者インピンの「序」、全体の構成（第1部手引き書と第2部記帳例題に分けること）、第1部の各章別の内容目次を示した後、第1章「総論」に入り、第29章「簿記法修得の必要性」で終わっている。

第2部の記帳例題は翻訳していない<sup>10</sup>。

フランス語版の第2部は、財産目録（棚卸表）・仕訳帳・元帳及び新元帳に及ぶ一連の記帳例示である<sup>11</sup>。

インピン簿記書の英訳書、1547年版

『会計帳簿の記録方法を説述した有名にして卓越した著書』

第1部 記帳計算の指針 1－29章<sup>12</sup>

第1章「総論」

- 2 「財産目録」
- 3 「帳簿組織」
- 4 「日記帳」
- 5 「役所の証明」
- 6 「日記帳」
- 7 「九種の商品取引法と日記帳の記入法」
- 8 「仕訳帳」

- 9 「借方と貸方」
- 10 「元帳」
- 11 「仕訳帳より元帳への転記」
- 12 「元帳で各勘定のスペースの割り当て」
- 13 「誤謬訂正法」
- 14 「年号の変更」
- 15 「小売店・小売帳」
- 16 「勘定締め切り・損益勘定」
- 17 「物々交換」
- 18 「組合取引」
- 19 「積送品勘定」
- 20 「為替手形」
- 21 「金額の記入法」
- 22 「手紙その他諸書類の整理法」
- 23 「諸種の補助簿」
- 24 「帳簿締め切り手続き」  
「売残商品勘定」（今日の商品棚卸し勘定の設置）  
「元帳締め切りに要する仕訳記入」
- 25 「誤謬発見・試算表の作成」
- 26 「旧帳の残高勘定」
- 27 「単に付随的な用語の説明」
- 28 「今までの要約的説明・注意」
- 29 「簿記法修得の必要性」

## 5 ルカ・パチョーリ1494年版『簿記論』と インピン1547年版『英訳簿記書』との比較

パチョーリ・インピンの各章対応関係と、パチョーリにはあつてインピンにはない各章を示せば下記のとおりである。

パチョーリ	インピン
第1章	第1章
2	2
3 「財産目録の模範例」	
4 「勸告と教育」	
5 「整理」	
6	3・4
7	5
8	6
9	7
10	8
11	9
12	9
13	10
14	11
15	12
16 「仕訳帳の商品勘定を元帳へ転記する方法」 (商品勘定の転記方法)	
17 「官庁との会計」	
18 「ヴェネツィア財務局との会計」	
19	20
20	17
21	18
22 「諸費用の会計」	
23	15
24 「銀行に関する会計」	
25 「収入及び支出勘定」	
26 「出張に関する会計」	

27	16
28	26
29	14
30 「計算書の作成」	
31	13
32 「元帳の貸借平均」	
33 「帳簿締め切り中の取引記入法」	
34	25
35	22
36 「元帳記入上の規則」	

付加的説明 1

2

19・21・23・24

27・28・29

インピン簿記書29章の内容を考えると、ルカ・パチョーリ簿記論の翻訳、あるいはその再現と主張しうる多くの類似点を見出すが、他方又、全く異なつた諸点も決して少なくない。その最も著しい特異点は、第24章以下の「簿記締め切り手続き」である。そこでは、今日のような一定期間毎に帳簿を締め切り、損益計算を行う期間損益計算制度の確立はまだみられないが、依然として口別損益計算制度を保ちつつも、売残商品勘定を設けて、今日の決算手続きと類似の帳簿締め切り手続きを述べていることは、第24章のとおりである。

従来の諸学者が、たとえば、マンツォーニでさえも<sup>13</sup>、帳簿締め切り時において売残商品の存在を取避したことを考えると、インピンの売残商品勘定の設置は、当時の簿記著としては全く画期的なものであったと言える。

原書者ポーロの商人としての実務的経験が、この实际的の簿記処理法を説きさせたのであろうが、しかし、根本的には、社会経済的地盤に目を注ぐ時に、当時のアントワープ市場の特異性と考えられる。

インピン簿記書は、従来のイタリア式簿記の単なる模倣・導入ではなく、16世紀前半のアントワープを背景とし、その実務的要求を反映した簿記法であったと、理解しなければならない。

インピン簿記書は、当時の簿記手引き書であり、優れた手引き書であったからこそ、フランス語版及び英語版が出版されたのである<sup>14</sup>。

ルカ・パチョーリ簿記論とインピン簿記書の相違は、イタリア式貸借簿記法の英国への導入後、パチョーリ簿記論が、16世紀という、英国商業資本発展途上の一世紀間に、どのように進展し変化したかを知るには、インピン簿記書と比較する事によって可能になるであろう。

## 6 結び

以上のようにここでは、英国16世紀の簿記書の概要を述べ、ルカ・パチョーリ1494年版『簿記論』とインピン1547年版『英訳簿記書』との比較をした。

中世イタリア、1494年にルカ・パチョーリの『簿記論』が出版され、その影響は、ドイツ・オランダ・英国・アメリカへ、そして日本には、380年後の明治6年と明治7年に福澤諭吉『帳合之法』によって複式簿記が導入された。これは、まさに簿記・会計世界一周論であるといえる。

現在は、会計の国際化の時代であるが、会計の国際化もさかのぼれば、その原点は日本では明治6年と明治7年の、福澤諭吉『帳合之法』<sup>15</sup>であり、世界では1494年の、ルカ・パチョーリ『簿記論』であると考えたいのである。

そして、ルカ・パチョーリ『簿記論』と福澤諭吉『帳合之法』の間には、英国簿記史とアメリカ簿記史の影響があったと言えるのである。

簿記学・会計学も一つの社会科学であり、それをよく理解するためには歴史的研究が必要であると考え、16世紀の英国簿記史におけるインピン『簿記書』について検討したのである。

21世紀も5年目に向かって会計の国際化はますます進むであろうが、簿記学・会計学の原点を大事に、大切にしたいと願うのである。

---

## 注

- 1 三代川正秀「文献案内：邦文ルカ・パチョーリ研究 1878-1994」  
拓殖大学『経営経理研究』54号、1995年（平成7年9月）、p.172.
- 2 中野常男著『会計理論生成史』中央経済社、1992年（平成4年）、p.38.
- 3 Arthur.H.Woolf: A short history of accountants and accountancy, London,1912.  
Chapter X II, English Works on Bookkeeping. p.131-p.133.  
片岡義雄・片岡泰彦訳『ウルフ会計史』法政大学出版局、1977年（昭和52年）第12章 イギリスにおける簿記文献 p.137-p.139.
- 4 小島男佐夫『英国簿記発達史』森山書店、1971年（昭和46年）、p.63-p.64.
- 5 片岡泰彦「世界最初の複式簿記文献」雄松堂書店『PINUS』29、1990年（平成2年）、p.16.
- 6 Luca Pacioli, Summa de Arithmetica Geometria Propotioni et Prportionalita 1494  
ファクシミリ版『ズムマ、算術・幾何・比および比例全書』、雄松堂出版、1989年（平成元年）  
John B.Geijsbeek, Ancient Double-Entry Bookkeeping 1914 Reprinted 1974  
平井泰太郎「ばちおり簿記書研究」神戸会計学会『会計論叢』第4集、寶文館、1920年（大正9年）  
片岡泰彦『イタリア簿記史論』森山書店、1988年（昭和63年）、第6章「パチョーリ簿記論の要約」p.143-p.169.
- 7 三代川正秀『麦踏み』D T P 出版、2004年（平成16年）3『スムマ』を所蔵する図書館 p.74.
- 8 M.Chatfield: History of Accounting Thought, New York, 1973. p.55.  
津田正晃・加藤順介訳 チャトフィールド『会計思想史』文眞堂、1978年（昭和53年）p.68-p.69.
- 9 小島男佐夫、前掲書、p.96-p.97.
- 10 小島男佐夫、前掲書、p.103.
- 11 小島男佐夫、前掲書、p.102.
- 12 インピン簿記書 Jan Ympyn Christoffels: Nieuwe Instructie, Nouvelle Instruction,1543  
の英訳本『著名にして優れた著作』



- A notable and very excellent works, 1547. Chapter I — X X IX  
編著者 B.S.Yamey 小島男佐夫 復刻版、大学堂書店、1975年（昭和50年）  
小島男佐夫、前掲書、p.106-p.122.
- 13 R.Brown: A History of Accounting and Accountants. Edinburgh, 1905. p.122.  
小島男佐夫、前掲書、p.123.
- 14 小島男佐夫、前掲書、p.123-p.124.
- 15 Bryant and Stratton's, Common School Book-Keeping, 1871  
「帳合之法原本」（仮題）『普通学校簿記書』洋学堂書店、1994年（平成6年）  
福澤諭吉訳『帳合之法』 明治6年6月 明治7年6月  
西川孝治郎 編集解説、「復刻叢書 簿記ことはじめ 1」  
『帳合之法』「全4冊 合本1冊」雄松堂書店、1979年（昭和54年）

## Summary

### The England Bookkeeping History and Ympyn's Bookkeeping

Eiichi Yoshizawa

The first exposition of the subject was issued in Venice 1494.

The book is titled *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*.

The well known Luca Pacioli's *Summa*, of which many copies have survived includes a section on double entry bookkeeping as practiced in Venice.

The year 1543 was an eventful one in the history of bookkeeping, for it saw the introduction of Paciolo's work into three countries, translations of the *De Computis* appearing almost at the same time in Dutch, French, and English.

Of the first tow we mentioned that a work by Jan Ympyn Christoffels in Dutch appeared at Antwerp in 1543, and a French translation of it the same year, which also marked the introduction of Italian methods into England.

The English translation of Paciolo also appeared in England in 1543. It was written by Hugh Oldcastle, a teacher of arithmetic, and is the first treatise on bookkeeping in language of which we possess any record. No original copy of Oldcastle's work is, unfortunately, known to exist, and our knowledge of it is derived from a reprint issued in 1588 by John Mellis, who describes himself as a "Scholemaister."

In 1547 a work appeared in London with the title of : "A notable and very excellent work, expressing and declaring the manner how to kepe a booke of accomptes or reconynges, &c." This is an English translation of Jan Ympyn's work.

James Peele, teacher and clerk at Christ's Hospital, wrote the oldest English bookkeeping texts which survive intact. The first, *The manner and fourme how to kepe a perfecte reconyng* 1553 was in the tradition of Pacioli, though Peele added instructions for keeping ledger accounts and used more illustrative entries.

*The Path-way to perfectness* 1569, a larger work in the form of a dialogue between teacher and student, included detailed instructions for ledger closings.

Peele's second book and John Weddington's *Breffe Instruction* 1567 contain the first English departures from the Italian tradition of double entry.

In the future, a certain level of standardization of Bookkeeping history will become necessary in Japanese junior colleges to promote Bookkeeping education.